

プロジェクト名	保健体育教師をめざす学生のためのキャリア・デザイン研究プロジェクト ー現職教員の「職能成長」の吟味からー		
プロジェクト期間	平成 22 年度～平成 23 年度		
申請代表者 (所属講座等)	中西純司 (保健体育講座)	共同研究者 (所属講座等)	本多壮太郎 (保健体育講座)
<p><b>I. 諸言</b></p> <p>体育教師に必要で求められる力については、資質や能力、専門的力量あるいは職能といった用語のもとで検討され、さらに、求められる体育教師像を明らかにしようとする体育教師論（中井，1997）の中でも議論されている。本研究では、体育教師に必要で求められる力を、これらの用語の辞書（広辞苑第六版）的意味合いから、生まれつきの性質、才能を意味する「資質」や単なる物事をなし得る力とされる「能力」、人の能力の大きさの度合である「力量」ではなく、職業・職務上の能力である「職能」という用語で表現し、検討することとする。</p> <p>これまで体育教師の職能については、数多くの提案や研究がなされている。例えば、嘉戸（1991）は、保健体育教師に望まれる一般的資質、能力として、7項目を示している。また、武隈（1992）は、体育に関する職能の内容について、情熱や人間性といった人格的側面と確かな教育（体育）観や理念を基底として、児童・生徒を理解する能力、体育の指導能力、体育の経営能力、学校や教育（体育）をとりまく諸条件の認識能力から構成されることを示している。これらの文献では、体育教師の職能について、教師はこうあるべきとする規範論的な内容が記述されているが、他の文献や調査による根拠資料が示されていない。このことは、木原ら（2005）によっても指摘されており、彼らは、戦後の日本において保健体育教師に求められてきた専門的力量に関する研究についてレビューを行い、教師や研究者としての経験や諸外国の文献資料を根拠として、教師はこうあるべきとする規範（理念）を検討した規範（理念）的研究と質問紙調査や授業観察という資料を根拠に力量を検討した実証的研究があることを明らかにしている。さらに、彼らは、保健体育教師の専門的力量について、体育授業における①知識、②パフォーマンス、③態度と④部活動、⑤生徒指導、⑥パーソナリティのカテゴリーに分類して整理している。また、中井ら（1996）は、体育教師のイメージについて大学生に調査を行い、求められる体育教師像を明らかにしている。</p> <p>また、最近では、中学生に質問紙調査を実施し、体育授業において教師に望まれる行動を明らかにしている実証的研究（村瀬・阿部；2010）も行われている。この研究によると、教師に望む行動として、充実した学習環境、学習者と同等の介入、批判、励ましを抽出している。さらに、体育教師像についての研究（中井ら，1996）では、大学生が考える中学・高校時代の体育教師のイメージについて、慕われる人、専門的な能力、熱心な指導など 11 因子を抽出している。</p> <p>以上のように、体育教師に必要な職能については、さまざまな提案や研究が行われており、先に示した通り、教師はこうあるべきとする規範的研究と、授業を受ける側である子どもや大学生に質問紙調査を行い検討した実証的研究がほとんどであり、体育を指導する教師の立場から職能を検討した研究はほとんど行われていない。特に、エキスパート・ティーチャーと呼ばれる優れた体育教師が、体育をどのように考え、指導し、職能をどのように捉え、それをどのように形成</p>			

しているかについて検討することは、職能構造について明確にできるだけでなく、体育教師の職能成長とキャリア形成のための具体的な指針を示すことができると考えられる。

そこで本研究では、エキスパート・ティーチャーと呼ばれる優れた体育教師に対して、体育についての考え方や必要な職能に対してインタビュー調査を行い、体育教師に必要で求められる職能について検討することを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 対象

対象者を選定するにあたり以下のような基準を設けた。

- (1) 20年以上の教職歴を有している
- (2) 附属学校教諭や体育研究所長期派遣研修員，主幹教諭，指導主事などの経験を有している
- (3) 体育に関する著書，研究論文，紀要，報告書などの執筆に携わった経験を有している
- (4) 優れた体育教師であるとの客観的評価を得ている（マイスター，福岡県体育研究所の紹介など）

上記の基準を満たす対象者を選定するにあたり，福岡県体育研究所の協力より，福岡県内で勤務し，体育の授業・研究実績や研修歴，教職経験などが豊富な教員について，福岡県体育研究所から情報提供を受けた。それらの情報をもとに，プロジェクトチーム内で最終的な選定を行い，計8名をエキスパート・ティーチャーとして本研究プロジェクトの対象とすることとした。対象者の平均年齢は47.88（±1.96）才，平均指導歴は25.29（±2.43）年，専門実技の内訳は陸上競技が5名，サッカー3名であった。

### 2. データ収集

対象者の職能を調査するにあたり，質問紙調査による対象者の基本的情報とインタビュー調査による専門的情報を収集した。

#### 1) 質問紙調査

対象者へは，研究の趣旨説明と協力依頼の文書とともに，対象者の年齢，専門実技，教職歴，これまで行った研究授業や公開授業のテーマ，執筆した著書，論文，紀要，報告書などの基本的情報について回答を求める質問紙を郵送した。また，その際，インタビューにおいて「体育の捉え方・授業哲学について」「運動の技能の高め方」「運動意欲の高め方」「運動が苦手な学習者への対応」「体育教師の職能」といった専門的情報を質問する旨の文書も同封した。

#### 2) インタビュー調査

インタビュー調査においては半構造的インタビューを採用した。半構造的インタビューの利点は，研究者が対象者の見方・考え方などについて，深い理解を得ることが可能であるということ，対象者がより柔軟に自分たちの考えを説明することができることである（Patton, 1990; Robson, 2002）。インタビューガイドは準備しておきながらもそれに固執することなく，質問者と対象者による会話形式のインタビューでは，質問者がいることにより対象者の質問に対する理解を助けたら，誤解が生じている場合は，それを修正したりでき，質問者に複雑な質問に対する答えを得ることが可能となる。このような理由により，対象者の職能に関する専門的情報を深層的，現実的，包括的に収集するために，半構造的インタビューが最も適した方法であると判断した。

対象者に，それぞれ約1時間から1時間半のインタビューに参加してもらい，事前の質問紙か

ら得られた基本的情報に関する確認や専門的情報に関することについて質問し、対象者に自分たちの考えや実践方法などについて語ってもらった。インタビューの場所は対象者の職場や筆者らの研究室であり、インタビュー内容は対象者の承諾のもと IC レコーダーにより録音した。

### 3. データ分析

インタビューで得られたデータについては、Côté ら (Côté *et al.*, 1993: Côté, Salmela & Russel, 1995) 及び北村ら (北村ほか, 2007: 永山ほか, 2007: 齋藤ほか, 2007) を参考に「トランスクリプション」「ユニット化」「タグ化」「サブカテゴリー化」「カテゴリー化」による定性的データの段階的分析法により処理された。

まず、全てのインタビューデータをテキスト化した。続いて、全テキストを 1 つの考えやエピソード、情報などを含む「ユニット」に分類し、262 のユニットが得られた。この分類後は、内容が共通するユニットにグループ化し、名称を付ける「タグ化」を行った。次に、タグをリスト化し、タグ及びその内容についての比較を重ねることでタグを再分類化し、同種のタグをサブカテゴリーとしてまとめた。この作業により 33 のタグを 8 つのサブカテゴリーに整理した。これらのサブカテゴリーについて、さらに広範疇へのグループ化を行う作業を行った。研究者らの間でもはや新しいカテゴリーは創出されないという判断に至るまでこの作業を継続し、表 1 に示す通り、最終的に「体育授業像」「体育授業実践」「体育教師の職務」といった 3 つのカテゴリーに分類した。

## Ⅲ. 結果と考察

「体育授業像」のカテゴリーは、エキスパート・ティーチャーである対象者が体育授業で目指すもの、心掛けていることから成る「授業目標」と、対象者が考える運動特性の捉え方、よい体育授業、体育と生涯スポーツの関係から成る「体育の捉え方」の 2 つのサブカテゴリーから構成された。

体育授業で目指すものとは、学習者に技能を習得させることや向上させ、授業を通してスポーツあるいはスポーツとの関わりを生涯にわたって楽しむ力を獲得させていくことであった。この授業目標を達成するために心掛けていることが、一人ひとりの学習者に配慮の届いた授業を実践することであった。学習者によって、技能レベルや運動・スポーツへの興味・関心などに違いがあることを踏まえ語られた内容であり、具体的には、学習者それぞれの学習状況を認識し、適切なタイミングで、適切なフィードバックや賞賛を行うこと、学習者が何か一つでも新たにできるようになる、学習者一人ひとりに役割を持たせる、居場所を作る、といった手立てであった。

「体育授業実践」のカテゴリーは、対象者による学習者の技能の高め方、運動特性への触れさせ方などの考えや実践的工夫から成る「技能的領域」、学習態度や意欲、学習者同士の関わり方の高め方についての考えや実践的工夫から成る「社会的行動領域」、指導性と主体性のバランスやフィードバックの与え方、学習者の評価、運動の苦手な学習者への対応などについての考えや実践的工夫から成る「学習者との関わり」、対象者が日頃の実践で感じる「体育授業における課題」といった 4 つのサブカテゴリーから構成された。

表1. エキスパート・ティーチャーの職能に関する構成階層カテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	タグ
体育授業像	授業目標	体育授業で目指すもの、体育授業で心掛けていること
	体育の捉え方	運動特性の捉え方、よい体育授業、体育と生涯スポーツの関係
体育授業実践	技能的領域	運動特性への触れさせ方、運動技能を高めるための考え方、運動技能を高めるための方法・工夫、
	社会的行動領域	態度の高め方、意欲の高め方、学習者同士の関わりの高め方、学習の雰囲気の高め方
	学習者との関わり	指導性と主体性、フィードバックの与え方、学習者の評価、運動が苦手な学習者への直接的対応、運動が苦手な学習者への間接的対応、運動が得意な学習者への対応
	体育授業における課題	体育授業の現実、授業における運動量、学習者の体力向上、行うのが苦手な種目、指導するのが苦手な種目
体育教師の職務	体育教師の職能	体育教師として果たすべき責任、体育教師に求められる力、体育教師を目指す者へ
	職能形成の下地	体育教師としての喜び・やりがい、反省点、経験した困難点、指導観・指導方法の背景、指導力の高め方、授業研究・教材研究について、授業外での指導・活動

技能的領域、社会行動的領域、学習との関わりは、それぞれに関係する考えや工夫が語られるとともに、対象者のほとんどが、できるようになる（技能）、身に付くようになる（態度）、わかるようになる（知識）、活用できるようになる（思考・判断）ためには、これらを相互に関連させることが必要だとの考えが示された。特に印象的であったのは、スモールステップによる様々な課題や細かな学習段階を準備し提供すること、運動が得意な学習者をミニティーチャーとして運動の苦手な学習者に対する指導に当たらせること、ミニティーチャーには教えてできるようにさせることの意義や価値を理解させること、学習者の取り組みに対しては褒めて意欲を高め技能の高まりにつなげていくことといった手立てであった。また、褒めるにあたっては、学習者が褒めてほしいタイミングで褒めること、褒めるべきタイミングを逃さぬよう授業中は常にアンテナ

を張っておくこと、予め学習者の学習状況の把握しておくことなどが強調された。

「体育教師の職務」の категорияは、体育教師の責任や体育教師あるいは体育教師を目指す者に対して求められる資質などについての考えから成る「体育教師の職能」と、対象者が経験した困難点や反省点、喜び、さらに、授業や教材研究についての考えなどの対象者の職能形成の土台となり、影響を受けた「職能形成の下地」の2つのサブカテゴリーから構成された。

このカテゴリーにおいては、授業において教師が実際に技能を見せる示範力、学習者の技能を高めることのできる指導力、学習者の変化として示される成果に気付く観察力に加え、学校全体での生徒指導におけるリーダー的存在としての統率力などが教師の「責任」といった強い使命として語られた。また、エキスパート・ティーチャーとして本プロジェクトの対象に選定されるだけの実績と実力を持つ対象者であることから、体育の価値を高めることも体育教師の大きな責任の一つであるという考えも示された。

対象者の職能はいかに形成されてきたかについては、研究授業や公開授業の実施、附属学校あるいは体育研究所などでの研修や勤務経験が重要な契機となっていた。また、このカテゴリーでは、学習者の変化やそれに喜ぶ姿や表情に触れることで対象者自身も喜びを感じ、さらに、授業実践における問題や反省を思考したりする中で上記のような責任を感じることにより、さまざまな課題や問題に取り組み、よりよい実践を志す意欲が高まる過程が確認できた。

#### IV. まとめ

本研究では、エキスパート・ティーチャーと呼ばれる優れた体育教師 8 名に対して、体育についての考え方や必要な職能に対してインタビュー調査を行い、体育教師に必要で求められる職能について検討した。その結果、エキスパート・ティーチャーの職能に関する考えとして、「体育授業像」「体育授業実践」「体育教師の職務」の3つのカテゴリーを抽出することができた。加えて、この3つのカテゴリーには共通に対象者の「一人ひとりの学習者に配慮の届いた授業」の実践を果たしたいという考えがあると解釈できた。

今後は対象者の数を増やし、エキスパート・ティーチャーの体育授業実践に考えや工夫などについて、より包括的、深層的に理解、解釈していきたい。特に、3つのカテゴリーに共通した上記の点については、他のエキスパート・ティーチャーにも共通する授業像や職能としての考えであるのか、具体的な実践はどのような考え、工夫により図られているかについて検討していきたい。

#### 文献

Côté, J. et al. (1993) Organizing and interpreting unstructured qualitative data. *The Sport Psychologist*, 6, 55-65.

Côté, J., Salmela, J. H. & Russel, S. J. (1995) The Knowledge of high performance gymnastic coaches: Methodological framework, *The Sport Psychologist*, 9, 65-75.

嘉戸 脩 (1991) 保健体育教師に望まれる資質、能力. 保健体育教師養成研究会 (編), 新盤保健体育教師への道, 大修館書店, 東京, pp.27-32.

木原成一郎・岩田昌太郎・松田泰定 (2005) 第2次世界大戦後の日本において保健体育教師に求められてきた専門力量. *学校教育実践学研究*, 11, 51-62.

北村勝朗・永山貴洋・齋藤茂 (2007) 優れた指導者の持つメンタルモデルの質的分析～音楽指導

場面における教育情報の作用力に焦点をあてて～，東北大学教育情報学研究，No. 6，7-16.

中井隆司（1997）体育教師論．竹田清彦他（編）体育科教育学の探求，大修館書店，東京，pp.381-396.

中井隆司・高橋健夫・岡沢祥訓（1996）体育教師のイメージに関する研究－特に，大学生の中学・高校時代の体育教師に対する回顧的析を通して－．スポーツ教育学研究，16:2，125-135.

永山貴洋・北村勝朗・齋藤茂（2007）優れた少年野球指導者の身体知指導方略の定性的分析，東北大学教育情報学研究，No. 5，91-99.

Patton, M. Q. (1990) Qualitative evaluation and research methods. 2nd edition. Newbury Park, CA:Sage.

Robson, C. (2002) Real World Research 2nd edition. Oxford: Blackwell Publishers Ltd.

齋藤茂・北村勝朗・永山貴洋（2007）スポーツ選手の練習の「質」を分けるものは何か？～エキスパート・スポーツ選手の熟達化過程における練習の「質」の定性的分析～，東北大学教育情報学研究，No. 6，45-54.

武隈 晃（1992）教師に求められる資質．宇戸正彦他（編），体育科教育法講義，大修館書店，東京，pp.189-193.